
魂喰らいのレイル×2～ソウルレイター～

戒斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂喰らいのレイル×²ソウルイーター

【NZコード】

N 8 5 4 8 M

【作者名】

戒斗

【あらすじ】

初の一次創作です。

え～っと、これはソウルイーターの一次創作です

オリキャラが主人公のぶつとんだ話になっています

原作のキャラもメインの人達はなるべく普通に出していくたいと思っています。

地道にデスサイズを目指して貰いたいな～って言う作者の思いが届くかどうかのお話です

楽しんでいて下さい

@注意事項は必ず読んで下さいね！

注意書き（前書き）

今回は、本文が小説自体の前書きみたいな感じなので、大して書くこと几乎没有・・・

今回は楽しむ要素はありませんが、ちゃんと読んでいくと嬉しいです
では、どうぞ

注意書き

本作は、ソウルイーターの一次創作です
なるべく原作のキャラを崩壊させないように努めますが、
確固たる保証は出来ないため、苦手な方は引き返すことをオススメ
します

主人公はオリキャラで、思いつきり飛ばしていきます
頑張りますので、是非読んで下さい

ちなみに、マンガの方は全て読めていない上に、アニメの方も最後
の方と最初の方しか知らない為、原作が壊れてしまう可能性もあります

なお、他の小説と平行して書いていくので、投稿の間隔が開いてしまつかもしませんがご理解下さい

納得のいった方だけ、当小説を楽しんで下さい

注意書き（後書き）

次回は、オリキャラ紹介です
よろしくお願いします

キャラ紹介（前書き）

連続投稿です

でもって前回の予告通りに今回の主人公のオリキャラを紹介します

キャラ紹介

レイル兄弟

ルシア・レイル

タクトとは双子の兄弟

月白色の髪のショートヘアに濡羽色の瞳

萌葱色の簪を好んで挿す

中世的な顔立ちで美少女でありながら、自覚は皆無
常にタクトと共にいる

タクトとは、双子であり、武器と職人の関係

普段はクールだが、タクトが絡むと性格が多少は変わる為、プロ

ン気味。

一人称は僕や私などで場によって使い分けるが、激怒すると俺になり男口調になる

武器化——扇

濡羽色の骨組みに月白色の扇面、萌葱色の要を持つ巨大な扇になる。
さらに要から要と同色のひもが2m程のびている

遠距離戦の時に武器化する

タクト・レイル

ルシアとは双子の兄弟（どちらが上かは不明）
外見はルシアとそっくりだが、髪が微妙に短い。

ルシアと同じで中世的な顔立ちで美男子でありながら自覚は皆無
普段無表情なルシアに変わって、常に笑顔を絶やさない。
常に笑っている分怒つたり無表情になつたりすると不気味。
常にルシアのことを気にかけている。ルシアと同じで、多少シスコ
ン気味

性格はルシアと正反対だが、根は同じ

武器化——鉄扇

濡羽色の巨大な鉄扇で要の部分から月白色の鎖が2m程のびていて、
先に三日月型の刃物がついている。
近距離戦時に武器化する

キャラ紹介（後書き）

この二人が原作の人達と絡みながら遊びまくります
次回からは普通の小説になつていくので、楽しんでいつて下さい
よろしくお願ひします

キッシュの恋恋ヒシノメトニー（漫畫也）

今回が、キッシュ君を暴走させてしましました。

キッドと恐怖とシンメトリー

「「来たね、デスシティー。」」

真っ暗な中で、小さな二つの声が重なる

「「こじが始まりだね」」

声の片方が言ひ

「死神様のお役に立てるな」

「ちりの声の方が少し低い

「「やつと僕らの存在を認めてくれる場所に来れた」」

また声が重なったのを最後に、物音は一切しなくなり、残つたのは
何もない闇だけ

「ハ～口～、レイル兄弟。待つてたよ～。早速今日から、一人には
死武専に通つて貰つけど、い～い～？」

呑気な口調。

けれど一人には一番聞きたい声だつた。

「勿論です、死神様」

異口同音とはこの事

「そ～う～？じゃあ早速教室に行つて貰おうか～。キッド、一人を案内してあげて～。教室にはシユタイン君がいて、生徒達に話はしてあると思うから～」

・・・・・ッあれ？返事が来ない。

「キッド～？」

死神様の側に控えていた黒髪に不思議な三本の線のある僕らと同じぐらいの年齢の少年。

僕らを凝視している。

「ツハイ！何だ？父上。」

やつと氣付いた。

「だ～か～ら～、悪いんだけど、この一人を教室まで案内してあげて。」

「分かりました。」

その後ついてここと並んで僕らの方をちらりと見て背を向けた

「彼はね、僕の息子のデス・ザ・キッド。分からぬことがあつたら何でも聞いてね、昨日のうちに、二人のことは多少話してあるから、多分話し相手になつてくれるよ」

「分かりました。お気遣い有り難うございます。死神様」

・・・・・キッドが背を向ける前に言つべきじゃないかなあと思いながらも僕らはまた口を揃えた

死神様に一礼して僕らは出て行つてしまつたキッドを慌てて追いかけた。

「そう言えど、キッドにレイル兄弟の名前、教えたつ？」

二人が出て行つた後に呴いたこの一言に、一人のデスサイズがズッコケタのは内緒のお話

「待たせてしまつてごめんなさい」

死神様のお部屋を出ると、ドアのところで、デス・ザ・キッドが待つていた。

謝るとまた凝視された。

「「何?」」

「…………といひでだ、名前を聞いていないんだが?」

…………

「「は?」」

「いや、だから、君らの名前を聞いていないんだが?」

「「僕らの名前?」」

「そうだ。君らの名前を教えてくれ」

「死神様から」

「聞いてないの?」

キッドはこの時初めて、この二人の個々の声を聞いた

「聞いていないな」

「「昨日のうちに説明しておいたって聞いたんだけど。」」

「明日から、レイル兄弟つて言つ双子の生徒が来るからよろしくね
つて言つモノなら。」

…………

「ルシア・レイルです」

「タクト・レイルです」

「俺は『デス・ザ・キッド』だ。 よろしく頼む」

「「ようじくお願ひします」「すま

今まで僕らは人と関わったことがほとんど無いから、こうこうう事には慣れていない。

たまにどうすればいいのか分からなくなる。

自己紹介が終わってから、キッドは多少喋るよくなった。

けど、

何故か僕らの方をよく見てくる。

何で？

確かに僕らは一卵性の双子で、そつくりで、無表情で黙っているとどっちがどっちか分からぬけど、ここまで凝視されたり、チラチラ見られたりするのは気分が悪い。

「「キッド君？僕ら、何か変？」

「ハッ?」

「わっかかる」

「何かいいのが見てるから」

「すいべ気になるんだだけや」

「…………ちよつとこいか?」

「?」

僕らの答えは聞かず、顔をしかめながらひりへ近寄つてくる。

自然と後ずさる僕ら。

二つの間にか横に並ばれる

僕の髪にじてあつた萌葱色の簪が二つの間にか抜き取られる

服に付いていたらしい埃や小さなハリが二つか一瞬にして取り扱われる

多少着崩していたコートも直される

「いやでかかった時間およそ一秒

もしかしたら、他の事もそれでいるかもしれないが、なにぶん早すぎて分からない。

「か、」

「「か?」」

またしても異口同音に揃いつ。

「完璧だー」

「「?」」

何が?

つていうか、僕らは何をされたんだ?

「」の完璧なシンメトリー。すんばらじーー

.....

シン...メト...リー?

「シンメトリーって」

「あの左右対称の」

「「あのシンメトリー?」」

僕らは顔を見合させて同時に首をかしげる。

いや、正確には、かしげようとした、だ。

かしげる前にキッドに頭を捕まれ強制的に前を向かされる。

一瞬見たキッドの顔は鬼の様な形相だった。

しかしそれも束の間、僕らが前を向いた途端に幸せそうな顔に変わつて、僕らを眺める。

ここまで来れば嫌でも分かる。

キッドはシンメトリーが大好き……ビーンではなくそれに異様な執着があるのだ。僕らは今までなかつたキッドへの感情に小さな、恐怖、を付け足した。

このままだとずっと逃げられないかもしれない、といつ予感が頭をよぎつた。

（（もう誰でも良いから僕らがキレでキッド君を手にかける前に助け））

助けを求める心の声も重なつている。

でもつて微妙にずれている……気がするのは 作者だけでしょうか？

（（何でもいいから、早く解放して～））

キッシュヒ恐怖とシンメトリー（後書き）

グダグダですみません。
感想下さい。

救いの手、トンプソン姉妹（前書き）

やつたー

今日一話田の投稿ダ

このペースがこのまま続いていくといいなあ
つていうことで楽しんでいって下せー

救いの手、トンプソン姉妹

「お、いたいた。つて、こりゃキッド、なーにしてんだよ

「アハハハキッド君（また）暴走してる~

今、聞こえそうで聞こえなかつた言葉にて、僕らの予想が当たつていふことを確信した。

「おお、リズ、パーティ」

しめた。僕らからキッドの気が一瞬逸れた。

僕らは急いで無理矢理整えられた服やらなんやらを直した。

「見てくれ、素晴らしいだね。完璧なシンメトリーだ……

キッドが再びこちらを振り向いたときには僕らは既に元に戻つていた。

キッドが文句を言おうとする前にキッドの気を僕らから逸らしてくれた女人の背の高い方が、前に出てきた。

「悪かったな、キッドの暴走に巻き込んでしまつて。こんなんだけど根は良い奴なんだ、勘弁してやつてくれ。」

顔の前で手を合わせて謝られる。

慣れていない僕らは、やつぱり顔を見合わせて首をかしげる。今度

は邪魔も入らず、そのまま自然に前を向く。

「「助けてくれて、ありがとうございました」」

彼女たちは僕らのことを助けてくれた。

恩を仇で返すような真似はしない。僕らの考えは決まっている

「あなたがそこまで言つなり」

「キッド君にキレるの」

「「我慢します。」」

ちょっと呆気に取られたような表情。 ちょっとした沈黙。

「…あ…ああ、ありがとうな」

「アリガト~」

僕らを助けてくれたもう一人の人。

「ちからはまだ幼さの残る顔立ちで、少女と呼んでもいいくらいだ。

後ろの方で凹んでいたキッドの方へ行ってしまった。

「「あの、教室まで案内してもらえないませんか?」」

またキッドに案内してもうのせなんか嫌だ。

キッドを一瞥して、僕らは女人に向き直った。

「いいよ~」

キッドの横から声が聞こえた。・・・・・聞いていたんだ・・・

「つて、じりパティ、何勝手に言つてんだ」

「ダメですか?」

何故か周りには、生徒達がいない。つまり、僕らが頼れるのはこの人達だけ。

「」で断られたら僕らは一生教室とやらにつけない。

どうしても承諾して貰わねば。

「ダメつて訳じやないけど・・・・・あんたら誰だ?」

ああ、そう言つことか。

僕らが何者か分からぬから、教室まで案内するのを済つてたのか。

「今日から死武専に」

「編入する」とになりました

「レイルです」

・・・・・・・・・これで分かつてくれるといいなあと思いながら

「僕らは答えた。

「『』——寧にじうも。私はキッドの武器でエリザベス・トンプソンだ。『』——ちは妹のパトリシア。通称は、私がリズで、こつちはパーティだ。よろしくな」

今日一回田の握手を求められる。

やつぱり慣れない、それでも僕らは一回田よりも自然に手を握り返せたと思った。

「・・・・・タクト・レイルです」

「ルシア・レイルです」

「『』——よろしくお願いします」

「それじゃあ行こうか。もう授業始まつてたんだが、キッドが遅いから呼びに来たんだ。普段ならそんなことシュタイン先生は言わないから、なんか変だと思ったらこういう事だったんだな。」

最初の方は僕らに向けられた言葉なのだろうが、後の方は独り言の

よう」に聞こえた。

「ハハハ」と？」

聞いたのはタクトだつた。

もともと僕よりもタクトの方がまだ喋る方だ。

それに、いつも無表情な僕と違つてあまり笑顔を崩さないから、滅多にない人付き合いの時は、だいたいタクトが会話をしていくくれた。

「シユタイン先生は、キッドがシンメトリーに目がないことを知ってるんだよ。・・・・・にしても人が悪いな。転校生が来るなら来ると教えといてくれればいいモノを」

今から考えたら、微妙ににやついていた気がしないでもないが、いつものことかもと思い直す。

「聞いていなかつたんですか？」

もう暫く僕は喋らなくとも大丈夫そうだ。

「聞いてない」

「きてないよ」

全く別のリズムの言葉が重なる。

僕らは歩きながら、また顔を見合せた。

ため息を吐きたい気分だ

死神様は、シユタイン先生という人が生徒達に説明をしておくから大丈夫と言つたのに。

「…………にしても、一人とも本当にそれくらだな

「え？」

いきなり話が変わったので、喋らないでいようと思つていたのに、つい声が出てしまつた。

「服装と、微妙な髪の長さの違いがなけりや見分けつかねえぞ」

……知つてゐる。僕らがそつくりなのも、見分けがつきにくいのも。

違いを少ししか作つていないから。

「…………あ、あと表情も違う。タクトの方はいつも笑つてゐるけど、ルシアは無表情だ。せつかく綺麗な顔してんだから、笑えばいいのに」

この時きつと僕は相当困つた顔をしていただろ。

顔形なんてハツキリ言つてどうでもいい。

どんな反応をすればいいのか分からなかつた。

リズが前を向いて歩いてくれていて良かつた。

そんなこんなで僕らは一つの扉の前まで来た。

「ジジがあたしらの教室だ。」

「 」「 」「 」「 」が・・・・「 」

ここが僕らのこれから居場所

救いの手、トンプソン姉妹（後書き）

次話もなるべく早く投稿できるように頑張ります

お気に入り小説に一人の人気がしてくれたみたいで

すごく嬉しい

勿体ないくらいで

ありがとうございます

ガチャ

（（どうして扉を開けたのが、さつきまで最後尾でへこんでいたキッドなんだろ？一番前を歩いていたリズが開けないか？普通。））

と思いながら最後尾になつた僕らが思つていたのは内緒の方向で

「お、やつと来ましたね」

部屋の中から聞こえてきたのは男の人の声。

チラと見ると、頭にネジが突き刺さつてゐるは、身体中ツギハギだらけだはで、可笑しいところばかりだ。

でも、こちらに向けた笑顔はとても優しそうだつた。

まともなのが、可笑しいのが、どちらともつかない人だ。……つて
いうのが、僕らがショタイン博士に抱いた最初の感想。

「そんなどころに突つ立つてないで中に入つてきてください。みんなに紹介しますから。」

途端に辺りが騒がしくなつた。

「何の話？」「紹介つていつたい何の？」

などと言つ言葉が僕らのこるといつまで聞こえてきた。

((……編入生が来るつて聞いてないのか?))

リズが、聞いてないと黙っていたから期待はしていなかつたが……

「何してるんですか?早く中に入つてください」

今度は一瞬にして静かになつた。わざとは打つて変わつて、僕らが入つてくるのを待つてゐる。

すゞ入りにくい雰囲気。

((帰りたい))

僕らは同時に足を踏み出した。

髪の色やら見た目やら、さらに双子だつて言つのが分かつた瞬間まで騒がしくなつた。

でもそれも先生がしゃべり出すまで。

「はいじゃあ、転校生を紹介します。レイル兄弟です」

「タクト・レイル

「ルシア・レイル

簡単な自己紹介で終わらせる

「はい、簡単な自己紹介をありがと。僕がこのクラスの担任をや

つているフランケン・シュタインです。よろしくちょうどいいから質問がある人は今彼らに聞いてあげて。」

・・・・・後々集られるのは面倒だけど、ここで立つたまま答えるのも面倒だ。

助けを求めたいけど、リズ達はもう既に席に着いてしまって隣にはいない。

対抗策を考えている内に手がチラホラ拳がつてくる。

「じゃあ・・・・・マカ。」

その内の一人をシュタイン博士が指す。

ベージュの髪を、ツインテールに結つた緑の目が綺麗な女の子だった。

「ハイ。マカ・アルバーンです。えーっと、一人は職人? それとも武器?」

面倒だ。大した対抗策もない。

「「僕」（私）達は武器であり、職人だ。」

僕は、こういう人前では一人称を僕から私に変える。タクトとかぶらないから、聞きにくくて面倒だ。

この答えを言うと、分かってくれる人と理解してくれない人がいる。

この教室にいる人もその一つに分かれていたようだつた。

でも、マカは分かつてくれたらしく、何も聞かずにありがとうございました。
け言つて再び座つた。

「他に何か質問はありませんか？」

シユタイン博士はさらに質問を催促するが、僕らはもう既に嫌気がさしていた。

また数人の手が挙がる。

（（今すぐ逃げ出したい））

「えへつと、じゃあ……、ブラック スター」

僕らの願いも虚しく質問タイムは続行する。

「おう！俺様はブラック スターだ。さつきの質問の答えの意味が分からん。詳しく説明してくれ！」

超俺様氣質来たー

めんどくさい。

「僕らはどちらも武器で

「近距離戦と遠距離戦で使い分けている。」

「分かった？」

これだけ説明すれば分かつてくれたかな?

……納得いかない様な顔をしている。

隣に座っていた髪の長い女の子が詳しく教えているらしく、一応座つてくれた。

もういい加減このくだらない質問タイムは終わりにしてほしい。

「他に何か質……と思いましたが、時間ももうあまりありませんからこれで終わりにします。最後にこの一人が死武専に慣れるまで面倒を見てくれる人は誰か居ませんか?」

((別に要らない))

でもそんな思い、誰かが察してくれるはずはなく、肝心の僕らをして話は進んでいく。

「…………何で誰も手を挙げてくれないんでしょう」

((そのまま誰も手を挙げるなよ))

この時点でのシュタイン博士の印象がかなり悪くなっていた。

「仕方ありませんね、分からないうとがあれば周りにいる人に聞くように、で、ちゃんと答えてあげるようにして下さる」

僕らに向けられた前半の言葉に頷いた。

「じゃあ、次からテキトーなところに座つて下さい。解散」

「」の言葉で、僕らはやっと解放された。

多分僕らが席に着くことは滅多にない。授業に出る気がないし出る必要もない。

僕らの目的は唯一つ、鬼神の卵と化した99個の魂と魔女の魂1個を手に入れて、デスマサイズとなつて、死神様のお役にたつこと。

それが僕らの至高の喜び。

転校生とショタイン博士（後書き）

はいそうです。レイル兄弟はとにかくやがりやさんです。
次回は頑張つて、もうちょい原作の人を出したいです。
・・・・・・・・出来るといいなあ

ブチギレナ前タクト→ヒラク スター（前書き）

もつなんか色々とびふつとんじゅつてます
でもって超短いです
ではじりべ

ブチギレ寸前タクト▼ソラフラック スター

「ルシアちゃん、タクト君…………だつたよね? セリフも言つたけど私はマカ。こつちは相棒のソウル。よろしくね」

「よろしくな

教室を抜け出そうとしたら、そんな風に声をかけられた。

セリフ質問をしてきた女の子だ。

「…………よろしく」

僕らはこのとき、必要以上に警戒していた。

いつものことだ。僕らの周りには信頼できる人が殆ど居なかつた。

初めて会つた人間を警戒するのは普通のこと。

死神様は僕らの信用できる数少ない人。

「二人は武器化するとどうこう形状になるの?」

マカつていうこの女の子は、きっと僕らが緊張しているとでも思つたんだろう。

僕らが話しやすいようにしているらしい。

「「扇」」

一
言

だつて僕らは緊張しているわけではなく、マカとソウルを警戒しているんだ。

必要以上のことを話す気はない。

「扇つて、武器になんのか？」

((失礼な。
なんなかつたら、武器にならない))

僕らは無言でソウルを軽く睨む。

それが気に入らなかつたらしく、文句を言おひとでもしたのかソウルが口を開いた。

が、その口から言葉が出てくることになかった。

理由は簡単。

「おい転校生、俺様より目立つなんて気にいらねえ！」

「ちょっと、ブラックスター……」

「何の用？」

僕はもう喋る気もなかつたが、タクトが代弁してくれた。

……が、

(もうそろそろ限界か)

その声から、タクトがキレる寸前なのは余裕で窺えた。

(早く向こうが引いてくれれば良いが……)

表情はいつもと変わらずにやかな笑顔だが、声にイライラが滲み出でいる。

自分達の形を変に言われただけでもいらついているのに、もう後一言一言向こうが僕らに突っかかってきたら確実にキレる。

「新参者のくせに、俺より立つなんて良い根性してると、じゃねえか。あ、あ、どうなんだよ。？」

「ひだりって好きで立つてる分けじゃない。そんなに立ちたいなら変わつてほしくらいだ。

「ち、ちよつと、ブラックスター……」

隣で頭を抱えているのはこのパートナーだろうか。

だとしたら気苦労が絶えないだろうな。

「好きで立つている分けじゃない。」

あああ～顔が無表情になっちゃったや。ビックリ喧嘩にだけはなりませんよ。」

「気に入らねえな

「それで？俺らには関係ないね。」

これは本格的にヤバイ。

一人称が僕から俺に変わった。

タクトは、普段は笑顔を崩さないが比較的……ものすげなくしゃすい。

しかもキレたら手におえない。

はつきり言つてたちが悪い。

「……タクトおさえ。ここは死神様のテリトリー、壊しちゃダメ。

これくらじや取まらないことは百も承知。

それでも一応声はかける。

「分かってる、壊しちゃない。けど……」

因みに僕らの会話は物凄く小声で行われているから、相手には僕らの口が動いているよしこしか見えない。

「何喋つてやがる。表へ出る。ぶつ瀆してやる。」

僕が相手の神経逆撫でじつひつす。

「上等だ。」

(バウヒヤウ)

ルシアと、ブラックスターのパートナーである彼の心の声
が重なったのを知るものはない。

ブチギレ寸前タクト▼Sブラック スター（後書き）

次回は戦闘になるのかな？

決闘！ルシアVSブラック スター（前書き）

ハロハロ～

7話目の投稿です

超駄文に仕上りました。ごめんなさい
それでもよろしければどうぞ

決闘！ルシア VS ブラック スター

「ここは少し前にキッド VS ブラック スター & ソウル・イーター戦が行われた死武専の入り口前。

「武器は無しで素手での決闘でどうだ？」

「却下だ。絶対に認めない」

即答。しかし答えたのは、タクトではなく僕だ。

タクトは基本遠距離戦の時に職人として僕を武器として扱う。

逆に、接近戦時の職人は僕だ。

肩の入れ墨を見れば分かる。タクトに喧嘩を売つてきたこいつは星族の生き残りだ。

暗殺を生業としていた一族の生き残り。そんな奴と素手でやり合つのはタクトには分が悪い。

「関係ない奴は黙つてろ」

「関係あるね。僕はタクトの職人だ。職人と武器がやり合つのはフェアじゃない」

喧嘩を止めるのは無駄だというのが分かっている。

でもタクトに不利な喧嘩は認めない。

絶対に

「こいつも職人なんだろ？..」

「直接敵とやり合つのは僕の仕事だ。タクトは遠距離においてその力が発揮される職人だ。お前とタクトが素手でやり合つなんて絶対に認めない。自分の武器であり職人であるタクトを、そんな危険な賭に投げ出したりしない。」

普段はあまり喋らないもんだから急に大量に喋ると疲れるんだよ。

僕は背中にタクトを庇うような形で前に出る。

ブラック スターの苛立ちが募ろつがここまで来たらもう関係ない。

「お前は自分より田立つてゐる僕らに對して怒つてゐるんだろ？.. だったら、僕が相手をしてやる。タクトとやり合いたいのならタクトを武器としてお前と戦つ^やてやる」

目で文句はあるか？と尋ねる。

タクトは何も言わない。

「いいぜ。負けた後にそんなことを言つて訳にされるのは嫌だからな。

逃げ道を消したこと後悔するなよ。」

「僕らだけが武器を使うのはフェアじゃない。武器の使用はそちらの自由だ。それから、ソウル・イーターお前も僕らに何か言いたいことがあつたんだろう？.. 言つてすむなら別にいいが、お前も戦^やり合いたいなら同時に來い。別々では面倒だ」

「ここまで言い切って息をつく。疲れた。戦闘なんかよりも喋る方がよっぽど疲れる。

前半は目の前のブラックスターに、後半はその後ろの方で傍観者と化していたソウルに向かつて投げた。

「遠慮しておくよ。眺めている方が楽しそうだ。」

「無難な答えだ。」

僕だって、実際は眺めていたい。

本当に面倒だ。

「タクト、それでいい？」

タクトは無言で僕に微笑みかける。

僕に向かつて手を差し出し僕はその手の中で武器化した。

「椿！」

「はい」

短い会話。けれどこの二人の間では十分だつたのだろう。一瞬後にはブラックスターの手の中に一つの小さめの鎌が鎖でつながつている武器、鎖鎌があつた。

「その鎖鎌……それに椿といつと、中務家の『令嬢』？」

「私のことを知っているの？」

知つてゐるも何も

「俺らに勝つたら教えてあげるよ。俺らとキミの関係。」
「…」

巨大な扇ばくそれが僕の武器化した姿。タクトは自分の身長より大きい扇を広げ、振るい風をおこす。

僕らのファーリドの完成だ。

僕らは武器と職人の関係を入れ替えた。

人に戻つた僕の手の中にあるのは月白色の鎖が要からのびる濡羽色の鉄扇。鎖は普段は2mぐらいだが、伸縮自在。先についた三日月型の小さな刃も大きさは自在。これが僕の武器。

ここまででの動作が一瞬で行われた。最初の合図で向かってきたブランクスターは風の影響で立ち往生している。この風は一度おこしたら、戦闘終了か、私が倒れるまで止むことはない。

相手の動きを僕に教え、制限し、僕のスピードを上げる。

「くつそう、邪魔くせえ風だ。」

僕の目の前までブラックスターが来ている・・・・・・が、僕まで刃が届かない。

僕らの魂の波長が起こしている風。これがある限りブラックスター一定程度の実力では僕には勝てない。

「あんなに大口叩いていたのにこの程度？そんなんじゃ、いつまで経つてもここまで来られないよ」

何もないのもつまらない。ずっと突っ立っているのも退屈だ。

風を少しだけおさえてみることにした。

やっと僕の所まで、ブラックスターの鎌がどどいた。

ガキンッ

鉄扇でそれを抑える。金属同士がぶつかり合つ音。戦っているという実感。

「良くここまで来れたね、ブラックスター。けど、最初の風を攻略できない限りは、君に勝ち目はないよつ」

言葉を言い終わると同時に僕は鉄扇の要からのがる鎖をブラックスターに向けて投げつけた。

それをもう一方の鎌で防ぐ、が、鎖はそのまま鎌に巻き付いた。ただの鎖なら、それで十分に防げるだろう・・・・が、この鎖の先には三日月型の刃がついている。巨大化して首を狙つことも出来るが、さすがにそこまではせず小さなキズを頬に残す程度にした。

(さすが暗殺人。刃の気配に気付いたか)

刃を見もせずに軽く避ける。

「流石、中務家の『』令嬢に星族の生き残りと言つたところかな？そ
う思わない？タクト。」

タクトに話しかけながら、ブラックスターの持つ鎌に巻き付いた
鎖を引く。

ブラックスターがバランスを崩したところで鉄扇を叩き込む。

『そうだね。魂の波長も安定しているしいいコンビだ。・・・・・
楽しいな』

これもかわされ、巻き付いていた鎖も解けてしまつ。

「ああ。久々だよこんなに楽しい戦いは。死武専、ここに来て良か
つた」

『そりだねつ・・・つと、ルシア、前見て集中！怪我しないようこ
気をつけて』

(心配無用)

僕はブラックスターには負けないよ。相手は大事なタクトに喧嘩
を売った大馬鹿者だ。

隠してはいたけど、僕だつてかなり怒つてゐる。

「お前らー！」の俺様を無視するとは何事だ！・・・椿！モード忍者
刀」

『はい。』

やつぱり一人だけで会話をするのは相手からしたら気分が悪いのだ
わ。」

面白いや、ぶちのめしてしまつては勿体ないくらいだ。

もつと遊んでいたいけど疲れてきちゃつた。

「タクト、疲れてきた。どうしよう。もつと遊んで相手の実力測る
？」

それとも……

「何をゴチャヤゴチャ喋つてんだー余所見してんじゃねえ！」

余所見するなつて……どう考へても無理でしょう。退屈なんだもん。

僕らが話している間じゅう短刀らしき物で切りつけてきてたけど、
鉄扇を使う必要も無い。ただ軽く避ければいいだけだ。

「ねえ、星族つて死武専に滅ぼされたんでしょ？何で生き残りが、
仇であるはずの死武専にいるの？」

退屈ついでに僕はブラックスターを見た瞬間から抱いていた疑問
を投げかけた。

星族は、越えてはいけない一線を越えたがために死武専に滅ぼされ
た。

ブラック スターからしたら親も親戚もみんな死武専に殺されたんだ。逆恨みではあるが死武専を恨み、憎んだとしても何ら不思議はない。

なのに今、ブラック スターは死武専に身を置いている。

僕はそれが不思議で仕方ない。

「親父もお袋も越えちやいけねえ一線を越えちまつた。力を求めて、鬼神への道を進んじまつた。だから殺された、当然の結果だ。」

「『強いんだな。・・・・・・・・尊敬するよ、僕らと君の状況は似ていのちうで全く違う』」

「なんの話だ？集中しやがれ！」

・・・・・・段々とブラック スターのスピードが上がってきた。僕の風を少しずつ克服してきた。

成長が早い。

僕に向けられた短刀を紙一重で交わしていく。

「サービスだ、風を弱めてやる。お前の得意な体術でやり合ってみたくなった。・・・・・・・・退屈させるなよ」

そう言って、僕は自分の周りに吹き荒れていた風を今度は完全に消しそつた。

「タクト！行くよ！」「『魂の共鳴！――』」「

力が溢れてくる。なんでも出来そうな気がしてくる。

あふれ出てきた力を手と足に集中する。 地面を蹴り、一瞬でブラック スターの懷にもぐり込む。

「ぐはっ！」

そのまますれ違い、去り際に手に溜めておいた魂の波長を叩き込む。僕らの波長は強力すぎるし、特殊で波長が噛み合う人も少ない。その為、一発叩き込むだけでもかなりの威力を發揮する。

「ブラック スター！！」

案の定ブラック スターは地に伏せる。

本当にいいコンビだ。僕の波長を叩き込んだのに、ブラック スターの波長が乱れても椿の波長が上手いことカバーしている。

でも、僕らの波長を喰らってすぐに立ち直れるわけがない。

僕はブラック スターの側まで歩いて行き、その首に鉄扇を当てる。

「終わっ！」

決闘の終了を宣言しようとした時だ。

気付いたら、ブラック スター息も絶え絶えで僕の首に忍者刀を当っていた。

ブラック スターが動けないと思つて油断した。

「俺・・・の・・勝ち・・・だ」

僕らにはない勝利への強い執念。・・・・・少しだけ羨ましいと思つてしまつ自分がいる。

『IJJに決闘の終了を宣言します』

椿の宣言。

ドサリ

・・・・・ドサリ?

決闘！ルシア VS ブラック スター（後書き）

戦闘のはずなのに、その描写が少ないのは何でだろ？。
しかもブラック スターが弱く書かれている気がする。
本当はもっと強いんですよ。
私がダメダメなだけなんです
・・・・・まだ強くなる前ついでに書いておいてください・・・

ブラック スターの執念 レイル兄弟の真意 キッドの疑問（前編）

サブタイトルが意味不明で「めんなさい

でもって短くて「めんなさい

謝ってばっかで」「めんなさい

でせりへれ・・・・・」「めんなさい

ブラック スターの執念 レイル兄弟の真意 キッドの疑問

…………ドサリ？

「ブラック スター！大丈夫？」

僕らが首の正体に気が付く前に椿が倒れたブラック スターを抱えた。

「楽しかった。…………ありがとう、それからごめんなさい。大丈夫？」

ブラック スターが倒れたのはまぎれもなく僕の所為だ。魂の波長を打ち込む前に共鳴なんてするんじゃなかつたと、今さら悔いて見るももう遅い。

「少しどころじやなく、最後の一撃はやりすぎてしましました。大事はないと思うけど、少しだけ安静にしていて下さい。」

「はい、分かりました。大丈夫ですよ、それにブラック スターの売った喧嘩の相手をしてくれてありがとうございました。」

そう言いながら椿は僕らに笑いかけてきた。小さく、綺麗に微笑みながら。

「僕も少しどころじやなくイライラしていたから、おあいこだ。」

そう言つたのは僕ではなく、いつの間にか人間の姿に戻つていたタクトだった。

口調が俺から僕に戻つてゐるといふを見ると、もう既に怒りは収まつてゐるらしい。

「約束…通り教え…でもうううう、椿…とお前の関…係。」

ブラック スターが無理矢理起き上がろうとしてくる。…が、息も絶え絶えで満足にいかない。

椿が慌てて肩を貸し、やつとのことで立ち上がる。

「大丈夫か？無理はしない方がいい。さつきはやりすぎた…。
・悪かった。」

ブラック スター、もう起き上がつてきたか。……早い。異常なくらいに。僕の魂の波長をくらつて意識があるだけでも驚きなのに。

「はい、約束ですからね、教えられることは全部教えますよ、椿さんのこと以外にも出来る限りの答えますから、聞きたいことは全部聞いてください。……ただ、また今度でも良いですか？ルシアが疲れてしまつたらしくて、そのうち招待しますから家へ来てもうえますか？」

二人が頷くのを見てタクトは背を向けて立ち去るとした。…が、

「ルシア？どうした？」

僕はタクトの袖を掴んでそれを止めた。

「ブラック スターだったよな？一つ聞きたい事がある。いいか？」

僕なりに出した結論を確かめたかった。

「いいぜ、なんだ？」

ブラック スターの勝利への執着の理由。

「君があそこまで勝利へ執着したのは自分のパートナーのためか？」
勝利後の第一声を聞いたとき、田立ちたがり屋のブラック スター
が言ったものとは思えなかつた。

「椿が知りたそうにしていたからな。……聞きたいことって言いつの
はそれだけか？」

「ああ、ありがとう。良いパートナーを持つたな。」

そして今度は僕も背を向けて立ち去らうとした。

「待て。」

今回止めたのはブラック スター。

体はそのままでも顔だけブラック スター達の方に向ける。

「今度は、本気のお前らに勝つてやるからな。覚悟しておけよ。」

言葉の代わりに後ろ手を振り、軽く微笑みレイル兄弟は立ち去った。

「よつ、ブラック　スターまた勝つたな。やつたじやん。」

「お疲れ」

かわりに俺らのところに来たのはマカとソウルの二人だった。

でも、二人の声は届かなかい。

「なあ、椿。あいつらどう思つた？」

「強かつた、凄く。」

そう、あいつらは本当に強かつた。

「また戦りあいてーな

「ルシア、最後の一撃、何で避けなかつた？僕でも見えていたんだから、ルシアにも見えていたんだろう？」

「時期さえ来れば、椿には僕らとの関係を知る権利があると思つてゐる。それに、楽しかつたからお礼……勝手に負けで、ゴメン」

「そつか……」

予想していた答えと同じだ。僕も最後は似たようなことを考えていたから、負けたルシアを攻めるつもりはなかつた。第一、ルシアが本気を出しいれば一秒とかからずにブラックスターは地に伏していただろう。

「ルー、絶対デスサイズにならうつな。もう後悔はしないよ、もうつともつと強くなろう」

「うふ。あんなこと、もう一度とあつちやいけないんだ。」

僕らの記憶の奥深くに記つてゐる最も悲惨で、悲しい出来事。

「「強くなりたい、世界を……この世界を有無を言わせずに変えるだけの力が」」

顔を見合わせずに僕らは拳を合わせた。

「父上、あの兄弟は何者なんだ？」

「ここは死神様のお部屋。そしてここにいるのは死神様、デスサイズ、そしてデス・ザ・キッド。」

「どうしてそんなこときへーの？」

「相変わらずひょうきんな話し方だ。…………が、ここにいる皆は何も思わない程に慣れてしまっている。」

「ルシア・レイルの戦闘能力が異常に高かつた。ブラックスターと戦つても、まだ本気を出していなかつた。三つ星職人と言われても納得がいく。何故わざわざ死武専に生徒として編入させる必要があつたのかも分からぬ。」

「彼女の戦闘能力は以上だつた。恐らく、遠距離戦であればタクト・レイルの戦闘力もあれと同じぐらいなのだらう。」

「彼らはね～え、特殊な家系に育つて特殊な境遇に陥り、闇の中から這い上がってきた努力家サン達だよ。」

「分からぬといつた顔のキッド

「どういふことな「時がくればあの子達から話してくれるよ。君が信用されればの話だけどね～え」

死神様はもう何も言わない。こいつたらいへら聞いてもきっとはぐらかされてしまうだろつ。つまり、これ以上の追求は無駄だ。

「…………そうですか。父上、それでは失礼します。」

キッドはもう既にあの二人から要警戒人物として恐れられていることをここにいる人達は知らないのでした。

ブラック スターの執念 レイル兄弟の真意 キッドの疑問（後書き）

メッチャ短かったです

でもって、なんか意味深な」とを言わせてみました

次回はもうちょっとと長く面白く書けるようにしたいです

やがて見るにと無き宝物（前書き）

今回もとつても短いです。

でもつて、考えていた内容が一切入っていません

初の任務を書きたかつたのに・・・

次回は書きたいです

わざわざ見つけてくれた宝物

——ねえタク、タクには夢、ある?——

これは、小さい頃の僕?懐かしいな

——あるよ。ルーは?あるの?——

この後に何が起るのか知らない、あの悲劇を知らない瞳

——もちろんあるよ。ルーの夢はね・・・・・・の、立派な武器
になる」とーそれから、みんなどぞーっと一緒にいることだよ

クスッ。僕このひ自分のことをルーって呼んでいたんだっけ。

——タクの夢は、ルーと一緒に違うのは、・・・・・・の武器
になるってことだけ——

僕らはこの時本当に幸せだった。大事な人がいなくなることなんて知らなかつた。

心の底から世界を否定することになるなんて知らなかつた。

——一緒に強くなろうね——

僕らの宝物。

奥深くにしまつた幸せな記憶。

タクトは答えずに僕の頬に触れた。そこで初めて、僕は自分が涙を流していることに気付いた。

「驚かれていた訳じゃないけど、気になつたんだ。」

05:52いつもよりも22分も寝過ごした。いつもは寝坊なんてしないから気になつたんだろう。

トレーニングの時間無駄にしちゃった。

「うん、タクト。すぐ起きて、トレーニングあるから。」

寝ちゃつてた分の練習量を早く取り戻さなきや。

「いいよ。無理しないで……顔が泣きそうだよ」

そう言つてタクトは僕のことを抱きしめた。

堪えていた涙が堰を切つたように流れてしまった。

「…………夢を・・見たの。・・・・昔の、とひ
も幸せだった頃の夢」

タクトは僕の頭を撫でて頷いてくれる。

「僕らが、夢を語り合つた時の夢」

ふと見ると、タクトも泣いていた。静かに、僕と同じように、僕を抱きしめたまま。

僕もタクトを抱きしめた。

「す、ぐ、幸、せ、で、嬉、しく、て、そ、れ、な、の、こ、す、ぐ、く、す、ぐ、く、悲、し
か、つ、た。」

僕は、もう知っているから。

あの夢が決して叶うことがないと

言い切つて、僕はタクトを離した。タクトも僕を離した。

僕はタクトの右目から溢れる涙を、タクトは僕の左目から流れる涙を拭つた。

もつ戻ることはないあの瞬間を思つて

涙を流した

宝物

胸の奥深くに仕舞つて

僕らは歩き続ける

どれだけ辛くても、悲しくても、前を向いて

歩き続けるんだ

やつ戾るじと無き宝物（後書き）

本当に短かったです。

ごめんなさい

次回はがんばります いつも書いている『が』ある

依頼（前書き）

段々と、サブタイトルを考えるのが面倒になつてきただので超単純にしてみました。

ガチヤツ

「はーい、出席を取りまーす」

いつものようにショタイン博士が教室に入ってきて、出席を取り始める。

「レイル兄弟は・・・・・またサボリですかね？」

困ったもんだ。
あの二人は編入以来一ヶ月、
魂学の授業に一切出て
いない。

まともに出る授業と言つたら、実技のみ

それまでばどりに居るのかさえ分からぬ

「…………困つたものですねえ」

?

「どうかしたんですか？シユタイン博士」

マカ？・・・・・・・・ああ、声に出してしまってはいたのか

「なんでもありますよ」

これ以上授業に出ないというなら補習も考えたいんですが、あの二人、テストの点はいいんですよね・・・

本当にどうしてくれよう ハア～ 仕方ない。あの二人は後でいいか

「今から言つペアは死神様がよんできているんで、今すぐに行つてくださいね。

マカとソウル、ブラックスターと椿、キッドヒトン・フソン姉妹」

今日はあの二人も死神様がよんできることで言つたのに

まあ、一応実技になれば出でてくるから、そこをとつ捕まえるとするか・・・

と言つことで、

「今日は予定を変更して、実技をやるんで練習場に行きます。」

生徒達が?な田で見ているのは気にしないでおきましょう

本当にどうして、実技になるときなり現れるんでしょうね

いつの間にか生徒達に紛れているレイル兄弟を見つける。

「ルシア、タクト、死神様がおよびです。すぐに・・・・・って既にいないし。」

まあ、一応伝えたからいいか。

「死神様がおよびなら早くそう言えっての」

お待たせしたら申し訳ないじゃんか

僕らは現在死武戦の中を全速力で走っている。

「つ・・・着いたー」

切れた息を整える。

「…………フー。失礼します」

死神様のお部屋。ドアを開けて入ったところから死神様のいらっしゃる所まで少しばかり距離がある。

僕らはその道のつを走らすに、けれど猛スピードで歩いていった。

「お待たせして、」

「申し訳ありませんでした。」

「死神様」

死神様が田に入ってきた途端に僕らは跪いて頭を下げる。

「顔を上げなさい。べつに怒ってないよ」

死に神様がそうおっしゃるなら。

つて言つことで僕らは顔を上げる。

そこでやっと僕らの他にもクラスのメンバーが何人かいるのが目に入つた。

「全員揃つたとこ」「ひで」「ん回はー」のメンバーで任務にあたつて貰つまー

レイル兄弟が死に神様に跪いたのを、呆気に取られて見ていたときだ。

「村が、消えたんだ。突然」

パパがそんな言葉から始めた任務内容の説明。

数日前にとある村が消えた。消えたと言つても建物とかじゃなくて、いるはずの住民が消えたんだ。

理由は不明。だが、恐らく魂を取られたものだと思われる。

住民が消える前日までは村は活気に溢れていて、それまでは魂を取られるような事件はなかつたことから、たつた一日で全員の魂を奪つた。犯人が複数いると思われる。

さらに、調査隊の報告によれば魔女らしき魂を複数、魂感知能力で確認したそうだ。

もしかしたら、奴らは組織化している可能性がある。

「ハツキリ言つてかなり危険な任務だ。俺は他の職人に任せようと言つたんだが、死神様がどうしてもお前にと仰つたのでお前に依頼するが、少しでも自信がない奴は今この場で降りろ。迷いがある奴もだ。迷いを抱えたまま向かつても死ぬだけだ。」

体が震え出す。怖い。けど、成功すれば、ソウルに魔女の魂を食べさせられるかもしれない。

答えは一つ

「…………誰も、降りないんだな？」

「お前らの仕事は、鬼神の卵と化した魂そして、魔女の魂を狩ることだ。」

「自分達だけでは無理だと思ったら、必ず応援の要請をすること。期待してるよ」

「…………」

今、私達は空にいる。

どうして？

簡単、人の消えた村とやらに向かつため。

「ルシア、きつくな」「こんなに沢山の人乗て……」

『大丈夫。タクトこそ、大丈夫？ 風操るの疲れない？』

今私達は、武器化し巨大化したルシア・レイルに乗つて猛スピードで村に向かつてゐる。

「しかしスゲーな、このまま行けば夜には着きそうだぞ。」

死武戦を出たのが四時頃。飛行機などを使えば着くのが、明日の昼になるだろ？ と「こと」で、レイル兄弟から申し出でてきたこの方法。確かに速い。出発してから三時間、上手くいけば一、三時間後には着くかもしれない。

『行こうと思えばこのくらいの距離、三十分もあれば余裕で着く。けど、僕と魂の共鳴ができない君達じゃ耐えられない』

これよりさうにスピードが出るつてどんなんだよ

「ルシアと共鳴するだけなら出来んじゃね？」

「無理だね。僕らの魂の波長は特殊で協力なんだ。共鳴させようとした時点でこの間のブラック・スターみたいにぶつ倒れるのが落ちだ。」

魂の波長なんてみんな違うから、特殊も何もないと思つけど……。
・・まあいつか。

『もうすぐ町に着く。今日はまさに泊まって聞き込み、明日の朝に村へ発つ』

……………そんなこと今初めて聞いたんだけど。

「こつからうううう予定になつてたんだよ？」

流石ソウル、私の相棒。私が聞きたかったこと聞いてくれた。

『『』の任務を受けた瞬間から。』』

ああそうですか。私達に教えるつもりは一切無かつたんですね

「なあにを言つていやがる。』のまま村に乗り込んで敵をぶつ潰すに決まつてんだろう」

全く、ブラックスターの馬鹿。どう考へても、今乗り込んでいくより明日の朝の方がいいに決まつてゐ。・・・・・あつ椿ちゃんが宥めてる。

「ルシア、町見えてきたけど、どの辺りに降りる？」

『あそこ、あの建物の屋上』

『了解』

『めん全然分かんない。建物なんて沢山あるし、何でそんだけの会話で通じるのかさえ分かんない。

『これから降りる。エリヤも良いからしがみつけ。振り落とされたくなればな。…………タクト、『気をつけて』

…………は？ いきなりなんですか？ 振り落とされたる？

「ちゅ、ちゅうと待つ…………」

でも私のことなんてお構いなし。段々スピードが上がりてきて、扇が斜めつてくる。

（振り落とされたるとこよりも、滑り落りやすだよ。つい言つたが何でタクト君は立つて居られる分け？）

みんなが必死にしがみついてくる中、タクト君は立ち上がりかけて両手を広げていた。

絶対みんな思つた。何で立つていられるの？ ってね

「着いたよ。はやく降りて。」

…………へ？ もう着いたの？

一瞬風圧がすさまじく、田を開いていたマカは恐る恐る田を開けてみんなの辺りで一番高い建物の屋上。

『せつと降りちやつて。』

周りを見ると、みんなもう降り始めている。私も慌てて降りる。

最後だつた私が降り終わると、ルシアちゃんは人の姿に戻つた。

・・・・・様子が変。すゞくフラついてる。

「あつ・・・・・・」

そのまま倒れてしまつた。が、床に打ち付けられる直前で、タクト君が支えた。

「だ、大丈夫? どうしたの?」

つい聞いちゃつたけど、理由は分かつてゐる。今までずっと私達を運んでいたんだもん疲れるに決まつてゐる。

「大丈夫。タクトも疲れてるんでしきう?」

「平氣だ・・・・・・よ」

こちらもフラついてゐる。平氣とは言つても説得力がない。

慌てて、ブラックスターと椿ちゃんが支えに入る。

「無事か? 一人とも。」

「「どう見える?」」

「無事には見えない」

二人は自嘲氣味に笑つてそのまま氣を失つた。

「死武専生の方々ですか？」

晩餐 椿の疑問？（前書き）

更新めちゃくちゃ遅れました
ほんとうにごめんなさい。

作者の身勝手さに呆れ返つていらない人はどうぞ読んで下さい

晚餐 椿の疑問？

「死部専生の方々ですか？」

そこに現れたのは、黒いスーツを着た男の人だった。

「そうですが、誰ですか？」

敵の可能性もある。全員が警戒している中、私が口を開いた。

「死神様並びにそちらのレイル様から伺っております。お部屋が用意してありますのでどうぞこちらへ」

答えになつてない。しかもお部屋つて何のこと？

・・・・・けど、レイル兄弟が気を失つてゐる今、一人を早く休ませてあげたいし、どこに行けば分かんない。つまり彼についていくほか無い。

そんなことを考えて、さううちに真つ黒い男の人は背を向けて下りていつてしまつた。

「行くぞ、みんな。今はついて行くしかない。早く一人を休ませねば」

キッド君の一言で、私達はあの真つ黒い人について行くことが決まつた。

「二階は今夜貸し切りになつておつます。」自由にお使い下さい。

」

・・・・・私達が降り立つた場所はどうやら高級ホテルの屋上だつたらしい。

しかも案内された部屋、と言つた階は最上階。多分見た感じでは一番良い部屋ではないかと思う。

「お食事はテーブルの上に用意してあります。何か用事があればおよび下さい。では失礼します」

バタン

それだけ言って真っ黒い男の人は居なくなってしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「じゃあ、私とブラックスターは、一人を寝かせてくれますから、
『飯食べちゃつてください。行くつブラックスター。』

「おひーー。」

「…………そ…………の必要は…………ない」

二人が、レイル兄弟を奥の部屋に運ぼうとしたとき、氣を失つていたタクト君とルシアちゃんが目を覚ました。

「椿さん、ありが…………とう。もう…………大丈…………夫だから」

説得力皆無。まだフラついている。それでも、さつきよりかは幾分マシになつていて見えた。

「大丈夫？ルシアちゃん。」

やつぱりまだ心配だ。椿ちゃんも心配そうな顔をしている

「大丈夫です。マ力さん、皆さんも心配をお掛けしてご免なさい。」

「でも、まだ顔色が悪いぞ。明日も移動はルシア達が頼りなんだ。ゆっくり休んでおけつて。」

「本当にもう大丈夫だから。リズ、明日だつていつもと同じようないける」

「けどよひ…………」

言葉を続けようとしたりズをルシアがじつと見つめて黙らせる。

「ああ、早く飯食べよつ。」

ルシアのその一言で、私達は真っ黒い男の人人が言つていたテーブルのある部屋に向かつた。

「にしてもすげえご馳走だな。よくこんだけ準備できたな一人とも、金掛かんなかつたか？」

「それ……なりに掛かつたよ……けど死神様か……ら仰せつかつた任務だからね……もし栄養不足で倒れられたりした……ら困る。」

タクト君は息も切れ切れに「ブラック スターの呑気な声に答える。

「失敗するわけにはいかないんだ」

ルシアちゃんの声も重なつた。

無表情であんまり喋らないルシアちゃん、いつも笑顔でルシアちゃんの分まで喋るタクト君。

少し前から感じてはいたけど、この一人の死神様への執着は異常だ。

それに、わたしの名前と武器の形狀で私のことを中務家の人物だと気が付いた。

彼らはいつたい何者なのか、椿の胸の中に一つの疑問が生まれた。

「椿さんどうしましたか？」

「さつきから手が止まっていますよ？」

「お口に合いませんでしたか？」

考え事をしている間、手が止まっていたらしい。レイル兄妹に余計な心配を掛けてしまった。

「そんなことないわ、とっても美味しい」

椿はそう言って軽く微笑んだ

「ただ、ちょっと考え事をしていたの。」めんなさいね

言葉を軽く付け足し、椿は手を動かし始めた。

確かに美味しい。さつきまでは他のことに気を取られていて味はあまり感じなかつた。

ふと周りを見ると、さつきまで綺麗に並べられていた料理が空になり、皿だけが積み重ねられていた。

その横には腹を大きくした彼女のパートナーが居ましたとさ。

晩餐 椿の疑問？（後書き）

次回からもまた遅れることがあるかもですけど、
頑張ります
見捨てないで下さい
でもつて感想を下さると、現金なことに喜んだ作者の手は猛スピードで動いてくれるかもです。ハイ

戦い前夜（前書き）

まことに遅くなつまして申しわけありませんでした。

まだまだ忙しくてめつたに戻つてはこれませんが。

少し頑張らうかと思ひます。

戦い前夜

みんながあらかた夕食を食べ終えたところで僕らは口を開いた。

「明日、日が昇ると同時にここを出て村に向かう

」「だから」「

最後の忠告だ

そう言った僕らの声に一瞬だけ気温が下がったような気がした。
僕らが下げるわけじゃない。

僕らの方を見る彼らの緊張のせいで。

「僕らの目的はただ一つ。」「

「死神様の命を達成することだ。」「

「こぞとこう時僕らは」「

「まよわす君たちを切り捨てる。」「

「必要があるならば」「

「この手にかける事だって一獻 こと わない

「協力するつもりはない。」「

「僕らは僕らで勝手にやるから。でも」

「「邪魔をするようなやつは容赦はない」」

二人は交互に、そして淡々と述べた。
いつもと変わらない、感情のこもらない声で。
まるでそれが普通だとでも言つようにして。
最後の言葉には殺氣すら感じられたといつた。
彼らは何も感じていないのだ。

「「良い夢を」」

二人はそつ言つて部屋を去つて行つた。

戦い前夜（後書き）

見捨てないでいてくださった方々ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8548m/>

魂喰らいのレイル×2～ソウルイーター～

2011年11月24日19時47分発行